

果実の記憶

憧れだったひとの  
胸元に頬を寄せた  
南国の熟れた果実のように匂い立つ  
香りの記憶

若かった私は  
あれから暫く  
大人の女は果物の匂いがするものだ  
と思っていた

お互い喪服で出会った  
皺が目立つようになったその手から  
何事もなかったかのように  
会釈で香典を受け取った

その時のそのひとの思いは  
知る由もないが  
差し出された手を握り  
年月の感触を確かめた気がする

甘く熟した果実の残り香の錯覚が  
在りし日の特別な時間は  
香りとともに表象となっていて  
私のどこかに永遠に存在し続ける